

学級で「大切にされる」感覚といじめ経験との関連

西 野 泰 代

(受付 2017 年 5 月 30 日)

問 題 と 目 的

子どもたちの心身を疲弊させ、健全な発達を阻害する「いじめ」という現象を予防することは、学校現場だけでなく社会全体において喫緊の課題である。国立教育政策研究所は、18 年間にわたる『いじめ追跡調査』から、「深刻ないじめは、どの学校にも、どのクラスにも、どの子どもにも起こりうる」ことを示し（国立政策研究所、2016）、いじめという現象を予測し介入することの難しさをあらためて浮き彫りにした。本研究は、いじめ低減に向けた効果的な介入に資する知見を提供することを目指し、いじめが起きやすい環境を予測するべく、学級で「大切にされる」感覚といじめ経験との関連について検討するものである。

いじめの生態学的理論

Bronfenbrenner (1979) によって提唱された社会生態学的理論 (Social ecological theory) では、人間の発達は個人と個人の関わる様々な環境システムとの相互作用のなかで構築されることが考えられた。この理論に基づき、いじめは個人の特性のみが原因として起こるのではなく、友人、仲間、家族、教師、そのほか地域、文化など様々な社会的環境と個人との相互作用の結果として起こりうるのではないかと考えられ、これまでいくつもの実証的研究や実践的検討がなされてきた (Espelage & Swearer, 2010; Goodstein, 2013 など)。

いじめと学校風土 欧米ではいじめの問題について環境面からアプローチする際にしばしば学校風土 (school climate) が取り上げられ、先行研究では、いじめの加害や被害の頻度に学校風土が影響を及ぼすことが報告されている (Barboza, Schiamberg, Oehmke, Korzeniewski, Post, & Heraux, 2009; Doll, Song, & Siemers, 2004 など)。

たとえば、いじめの加害と被害の高い頻度と関わる学校風土要因として、教師と生徒の関係不良 (Doll et al., 2004)、教師サポートや学校での活動への関与の低さ (Barboza et al., 2009) といったものが挙げられており、学校内でのネガティブな対人関係がいじめの頻度と関わるものが明らかになってきた。

「大切にされる」感覚といじめ経験 Nansel, Overpeck, Pilla, Ruan, Simons-Morton, & Scheidt (2001) では、支援を得られているという感覚が低く、かつ、葛藤が多いような学校に在籍する生徒はいじめ加害に加担しやすいことが示唆された。また、Bollmer, Milich, Harris,

& Maras (2005) では、仲間とのつながりが攻撃やいじめ被害を低減することが報告され、親しい友人との関係が健全な仲間関係の規範となって、思いやりや向社会的行動を促進する可能性が示された。

一方で、欧米と異なり、日本の子どもたちは学校にいる時間のほとんどをひとつの学級で過ごし、また、学級単位での行動が多いため、子どもたちにとって学校よりもむしろ学級からの影響が大きいと考えられる。そのため、日本では、子どもの環境要因として学級の風土に焦点を当てた研究が散見される（伊藤・松井，2001；伊藤，2017；岡安・高山，2000；大西・黒川・吉田，2009）。

たとえば、岡安・高山（2000）は、中学生を対象とした調査から、いじめ加害群には教師との関係がよくない生徒が多いことを報告した。また、小学 5 年生から中学 3 年生を対象とした大西ら（2009）の調査研究では、生徒の認知する教師のポジティブな態度（受容、親近など）が間接的にいじめ加害傾向を抑制する可能性が示された。このように、教師と児童生徒間関係といじめ加害との関連についてはいくつかの研究で明らかにされつつある一方で、生徒間を含めた学級内での人間関係といじめ加害との関連についての実証的検討は少ない。伊藤（2017）は、人間関係における自己肯定感の低さと加害経験との関連を明らかにしたうえで、「人間関係上満たされないものを抱える子どもたちがいじめに走りやすい」ことの可能性を示唆した。こうしてみると、学級の中でお互いに思いやりを持って接することのできる関係性が築かれていれば、人間関係上満たされないものを抱えることも少なく、些細なことから相手を攻撃するようないじめは起こりにくいだろうと考えられる。中学生を対象とした細田・田嶋（2009）では、自己肯定感と他者肯定感との間に中程度の有意な正の相関が得られており、また、松尾（2001）は、自分のよさを認めてくれる仲間の存在を通して、仲間以外の一般的な他者を価値あるものとしてとらえられるようになることを示唆した。子どもたち一人ひとりが「自分は大切にされている」と思えることが、他者を大切にしたい気持ちにつながり、むやみに人を攻撃するようなことは起こらないのではないだろうか。

これまで、学級内の人間関係を測定するものとしていくつかの尺度が考案され、実際に学校現場で活用されているが（伊藤・松井，2001；河村，2000；栗原・井上，2010 など）、その多くは学級の状態を測定することを目指したものである。たとえば、伊藤・松井（2001）では、「自然な自己開示」「生徒間の親しさ」「学級内の不和」「学級内公平さ」といった指標で学級内の人間関係について検討されているが、個々の子どもが学級内でどのように処遇されているかをここから推測することは難しい。さらに、伊藤・松井（2001）で作成された尺度だけでなく、その他のアセスメントツールについても、いじめ加害との関連についての実証的検討が十分になされているとは言い難い。また、従来の尺度は多面的に学級の状態を測定することを目指しているために質問項目が多く、手軽に使用できるとは言えず、学校現場に

おける使用頻度はそれほど多くない。しかしながら、学級内での子どもたちの状況は日々変化しており、適切な支援や指導が速やかになされるためには、度々使用しながら状況を簡単に把握できるアセスメントツールの開発が必要だと考えられる。

そこで、本研究では、子どもたち一人ひとりが学級内でどのように処遇されていると感じているかを測定する尺度（（学級で）大切にされる感覚尺度）を新たに作成したうえで、その尺度がいじめの加害行動をどの程度予測できるかについて検討することを目的とする。いじめの加害行動については、近年、SNSの普及により被害の増加が懸念されているネットいじめ（cyber bullying）も含めて検討することとする（文部科学省、2016）。そのため、論文ではネットいじめと対照するため、「従来のいじめ（traditional bullying）」という表記を用いる。また、先行研究の知見より、いじめ経験には学校段階差や性差が報告されており（岡安・高山、2000）、本研究では学校段階差と性差にも注目して検討を行うこととする。

（学級で）大切にされる感覚尺度の信頼性と妥当性の検討

本研究の目的のひとつは、（学級で）大切にされる感覚尺度を新たに作成することであり、そのため、尺度の信頼性と妥当性について検討する必要がある。先行研究では、個人にとって重要な領域での成功や重要な他者からの受容や賞賛によって、その人の自己価値が高まることが示唆されており（Harter & Marold, 1991）、学級で大切にされることが自己価値を高めることが推測される。また、本研究で作成する尺度は、学級でどのように処遇されているかを測定するものであるため、既存の学級風土を測定する尺度と関連することが予測される。

そこで本研究では、新しく作成する尺度の併存的妥当性を確認するため、自己価値および学級での人間関係や学級への満足感を取り上げて、（学級で）大切にされる感覚との関連について検討する。自己価値の高さ、学級での人間関係の良さや学級への満足感と（学級で）大切にされる感覚との間には正の関連が得られるであろう。

以上のことから、本研究では、（学級で）大切にされる感覚尺度を新たに作成して、その尺度の信頼性と妥当性を確認したのち、その尺度が従来のいじめ加害とネット上でのいじめ加害の経験をそれぞれ予測するかどうかについて検討することを目的とする。

方 法

調査対象および調査時期

中規模都市にある小学校3校と中学校2校に対し、2016年6月に質問紙調査を実施した。分析対象者は728名（小学生：297名、平均年齢10.26歳、SD=0.97、女子51.9%；中学生：431名、平均年齢13.32歳、SD=0.94、女子47.8%）であった。

調査手続き

調査に先立ち、教育委員会を通じて調査の趣旨等を各学校長らに説明した後、同意の得られた学校に調査を依頼した。調査用紙は学校で配布されたが、実施は持ち帰りによる方法をとった。各家庭には調査の趣旨を説明する文書を配布し、調査への協力は本人の自由意志に任せた。回収は学校で行われたが、回答内容の秘密保持のため、質問用紙とともに配布された封筒に入れて厳封した上で提出するよう依頼した。

調査内容

(学級で) 大切にされる感覚 Goodstein (2013) を参考にして新たに作成された 7 項目を用いた。「クラスにいるときのあなた自身を思い浮かべて、それぞれの質問について、あてはまる数字に 1 つ ○ をつけてください。」という教示文により 5 件法 (1. 「まったくあてはまらない」～5. 「とてもあてはまる」) で回答を求めた。

いじめの加害経験 岡安・高山 (2000) で使用されたいじめの加害 3 項目に加えて、ネットいじめの加害 2 項目 (「ネットで、だれかの悪口を書いた」「ネットで、だれかを友だちリストからはずそうと仲間に呼びかけた」) を用いた。各加害経験について過去 3 か月間にそのような行動がどのくらいあったかどうか 4 件法 (1: 「一度もなかった」、2: 「一度だけあった」、3: 「数回あった」、4: 「何度もあった」) でたずねた。

学級風土 伊藤・松井 (2001) で作成された学級風土を測定する尺度の中から「自然な自己開示」「学級への満足感」を使用した。5 件法。

自己価値 松尾 (1999) で作成された自己価値を測定する 5 項目を用いた。4 件法。

結 果

(学級で) 大切にされる感覚尺度の構成

(学級で) 大切にされる感覚を測定する 7 項目について、データに欠損のなかった 722 名 (小学生男子 141 名, 小学生女子 152 名, 中学生男子 224 名, 中学生女子 205 名) を対象に主成分分析を実施した。その結果を Table 1 に示す。第一主成分に対する寄与率は 69.86% であり、いずれの項目においても第一主成分に対する主成分負荷量が .78 以上であった。次に、(学級の中で) 大切にされる尺度 7 項目について、最尤法による確認的因子分析をおこなった (Table 1)。その結果、データへのあてはまりの良さを示す適合度指標のいずれにおいてもおおむね十分な値が得られた ($\chi^2(15) = 206.392$, $p < .001$, GFI = .924, AGFI = .859, CFI = .947)。いずれの項目においても .77 以上の高い因子負荷量を示した。

さらに、尺度の適用について検討するため、男女別に多母集団同時分析を実施したところ、配置不変モデル ($\chi^2(30) = 265.296$, $p < .001$, GFI = .904, AGFI = .821, CFI = .934,

AIC=317.296) と測定不変モデル ($\chi^2(36)=290.914$, $p<.001$, GFI=.898, AGFI=.841, CFI=.929, AIC=330.914) のどちらも適合度指標においておおむね十分な値が得られ、男女ともに同一の因子構造であり、尺度得点について男女別の検討が可能であることが確認された。また、情報量基準の値（本研究では AIC を用いた）から、測定不変モデルより配置不変モデルのほうが良いモデルであることが示された。

Table 1 (学級で) 大切にされる感覚尺度の主成分分析ならびに確認的因子分析結果

項目番号	項 目	主成分 負荷量	確認的因子 分析における 因子負荷量
4	私の良いところを認めてくれる	0.88	0.90
3	私の考えをたいせつにしてくれる	0.86	0.89
6	私の意見を尊重（そんちょう）してくれる	0.85	0.87
5	私のおこないに「ありがとう」と言ってくれる	0.84	0.85
2	私の気持ちをわかってくれる	0.83	0.83
1	私の話を聞いてくれる	0.80	0.84
7	私の元気がないとみんなが心配してくれる	0.78	0.77

(学級で) 大切にされる感覚尺度の信頼性分析

(学級で) 大切にされる感覚尺度 7 項目について、Cronbach の α 係数を算出した。その結果、7 項目の α は .93 であり、十分な内的一貫性を確認できた。

(学級で) 大切にされる感覚尺度の記述統計量

(学級で) 大切にされる感覚尺度について、学校段階差と性差を検討するために 2 要因分散分析をおこなった。その結果を Table 2 に示す。性差において、有意な主効果が得られ ($F(1,718)=13.42$, $p<.001$)、女子の得点が男子の得点よりも有意に高かった。学校段階差について有意な主効果は示されなかった。一方で、交互作用が有意であったので、単純主効果の検定をおこなったところ、女子において有意な学校段階差が示され ($F(1,718)=6.11$, $p<.05$)、小学生女子の得点が中学生女子の得点よりも有意に高かった。これにより、以降の分析は、男女別におこなうこととした。

Table 2 (学級で) 大切にされる感覚尺度の学校段階別・性別平均値、標準偏差と 2 要因分散分析の結果

	小学生		中学生		F			η_p^2		
	男子 (N=141)	女子 (N=152)	男子 (N=224)	女子 (N=205)	学校段階別	性別	交互作用	学校段階別	性別	交互作用
(学級で) 大切にさ れる感覚	3.74 (.90)	4.14 (.81)	3.86 (.87)	3.92 (.74)	0.67	13.42***	7.14**	0.001	0.018	0.010

** $p<.01$, *** $p<.001$

(学級で) 大切にされる感覚尺度と他の尺度との関連

本研究で新たに作成した(学級で)大切にされる感覚尺度の妥当性を確認するために、同尺度と自己価値、自然な自己開示、学級への満足感の各尺度との関連を、男女別に算出した。その結果を Table 3 に示す。

Table 3 (学級で) 大切にされる感覚尺度と各変数の相関関係

	(学級で) 大切にされる感覚	
	男子 (<i>N</i> = 365)	女子 (<i>N</i> = 357)
自己価値	.55***	.60***
自然な自己開示	.67***	.63***
学級での満足感	.65***	.55***

****p* < .001

男女ともに、自己価値、自然な自己開示、学級での満足感の各尺度と(学級で)大切にされる感覚尺度との間に有意な正の相関が示された。いずれも .55～.67と中程度以上の相関係数が得られた。

(学級で) 大切にされる感覚尺度といじめ加害との関連

次に、(学級で)大切にされる感覚尺度が従来のいじめ加害とネット加害の各経験を予測するかどうかについて検討するため、(学級で)大切にされる感覚尺度を従属変数として、加害経験の有無による *t* 検定をおこなった。なお、(学級で)大切にされる感覚尺度がいじめ加害経験を予測する程度について他の尺度と比較するため、尺度の併存的妥当性確認で用いた学級風土尺度「自然な自己開示」「学級への満足感」も従属変数として分析に用いた。

従来の加害経験 3 項目とネットいじめ加害 2 項目について、それぞれ 4 件法のうち 2～4 の数字を選択した者を「(その項目について) 経験あり」とした。従来の加害経験 3 項目のうちひとつでも経験があれば「従来のいじめ加害経験あり群」、ひとつも経験がなければ「従来のいじめ加害経験なし群」、同様に、ネットいじめ加害 2 項目のうちひとつでも経験があれば「ネットいじめ加害経験あり群」、なければ「ネットいじめ加害経験なし群」としてそれぞれ分類した。男女別に *t* 検定をおこなった結果を Table 4 に示す。

男子では、従来のいじめ加害について、いずれの尺度においても経験の有無による有意な得点差が示され、加害経験なし群は加害経験あり群と比較して、学級で大切にされる感覚得点、自然な自己開示得点、学級への満足感得点がそれぞれ有意に高いことが明らかになった。また、ネットいじめについて、加害経験なし群は加害経験あり群と比較して、学級で大切にされる感覚得点と学級への満足感得点がそれぞれ有意に高いことが明らかになった。自然な

自己開示について群間の有意差は示されなかった。

女子では、従来のいじめ加害経験について、いずれの尺度も経験の有無による有意な得点差は示されなかった。一方で、ネットいじめ加害について、(学級で)大切にされる感覚尺度においてのみ、経験の有無による有意な得点差が示され、加害経験なし群は加害経験あり群と比較して有意に得点が高いことが明らかとなった。

Table 4 いじめ加害経験の有無別による各尺度の平均値、標準偏差と t 検定の結果

男子	従来のいじめ加害		t 値	ネットいじめ加害		t 値
	経験あり ($N=45$)	経験なし ($N=312$)		経験あり ($N=3$)	経験なし ($N=357$)	
(学級で) 大切にされる感覚	3.25 (1.00)	3.89 (0.84)	4.66***	2.33 (0.73)	3.82 (0.88)	2.93**
自然な自己開示	3.25 (1.11)	3.83 (0.99)	3.59***	3.33 (0.38)	3.76 (1.02)	<i>n.s.</i>
学級への満足感	3.25 (1.34)	3.98 (1.03)	3.43**	2.42 (1.23)	3.90 (1.09)	2.34*

女子	従来のいじめ加害		t 値	ネットいじめ加害		t 値
	経験あり ($N=45$)	経験なし ($N=311$)		経験あり ($N=6$)	経験なし ($N=351$)	
(学級で) 大切にされる感覚	3.92 (0.79)	4.03 (0.77)	<i>n.s.</i>	3.31 (1.02)	4.03 (0.77)	2.27*
自然な自己開示	3.64 (1.03)	3.73 (0.97)	<i>n.s.</i>	3.33 (1.16)	3.73 (0.98)	<i>n.s.</i>
学級への満足感	3.71 (1.13)	4.01 (0.99)	<i>n.s.</i>	3.38 (1.36)	3.98 (1.00)	<i>n.s.</i>

* $p<.05$, ** $p<.01$, *** $p<.001$

考 察

本研究では、(学級で)大切にされる感覚を測定する尺度を新たに作成したうえで、従来のいじめ加害経験およびネット上でのいじめ加害経験との関連について検討することを目的とした。以下、その結果について考察する。

(学級で)大切にされる感覚尺度の作成

本研究で作成された(学級で)大切にされる感覚尺度は、主成分分析の結果、7項目のいずれも第一主成分に対して高い負荷量を示し、また、確認的因子分析の結果、適合度指標においておおむね十分な値を示したことで1因子構造であることが確認された。さらに、性別による多母集団同時分析の結果、配置不変モデルと測定不変モデルのいずれにおいてもおおむねデータに対するあてはまりの良さが示された。これにより、男女とも同一の因子構造であることが示され、尺度得点について男女差の比較が可能であることが確認された。

この結果に基づいて、(学級で) 大切にされる感覚の学校段階差および男女差について検討したところ、性別と交互作用について有意な差が確認され、女子の得点が男子の得点に比べて有意に高く、また、小学生女子の得点が中学生女子の得点に比べて有意に高いことが示された。中学生を対象とした細田・田畠(2009)では、友人からのサポートの知覚について、サポートの種類にかかわらず性差が示されたことが報告されている。また、小学4・5年生を対象とした長谷川・堀内・鈴木・佐渡・坂元(2009)では、男子よりも女子のほうが共感性および視点取得の得点があり有意に高いことが示されている。それゆえ、これらのことから推測して、本研究で示された結果は納得のいくものであろう。「私の良いところを認めてくれる」「私の意見を尊重してくれる」など、相手(または周囲)が自分に対して示す好意や情緒的サポートを女子のほうがより敏感に受け止められるということが本研究の結果からも示唆されたといえよう。その一方で、小学生女子のほうが中学生女子よりも(学級で)大切にされる感覚得点があり有意に高かったのは、中学生女子における友人関係維持の難しさに起因するのかもしれない。先行研究では、中学生女子の友人関係で親密確認活動が多くみられることと、その背景に友人に対する不安定な感情があることが示唆されており(榎本, 1999)、中学生女子では小学生女子と比較して、「私の気持ちをわかってくれる」と素直に思えないような対人関係上の葛藤が存在しやすいのかもしれない。

(学級で) 大切にされる感覚尺度の信頼性・妥当性の検討

作成された(学級で)大切にされる感覚尺度7項目について α 係数を算出したところ、.93と十分に高い値が得られた。これにより、本尺度の高い内的一貫性が確認された。

次に、(学級で)大切にされる感覚尺度の併存的妥当性を確認するために、既存の尺度変数との間の相関係数を男女別に算出した。その結果、本研究で作成された(学級で)大切にされる感覚尺度と自己価値との間に男女ともに.55以上の有意な正の相関が示されたことは、Harter & Marold(1991)の知見に準じた結果であり、学級の中で自分が大切にされていると感じることが自己価値を高めることにつながることを本研究においても検証できたといえよう。さらに、学級風土の下位尺度である自然な自己開示および学級への満足感と本研究で作成された(学級で)大切にされる感覚尺度との間に男女とも.55以上の有意な正の相関が示されたことは、学級での人間関係を測定する本尺度の妥当性を示す根拠のひとつだといえよう。

(学級で) 大切にされる感覚といじめ加害との関連

本研究の目的のひとつは、(学級で)大切にされる感覚が従来のいじめ加害とネット上のいじめ加害を予測するかどうかについて検討することであった。そこで、従来のいじめ加害経験とネットいじめの加害経験それぞれについて分析対象者を経験あり群と経験なし群の2群に分けて、(学級で)大切にされる感覚、自然な自己開示、学級への満足感をそれぞれ従属変数とする t 検定を男女別におこなった。その結果、男子において、従来のいじめ加害経験あ

り群は加害経験なし群に比べて有意に（学級で）大切にされる感觉得点が低く、また、ネットいじめ加害についても、加害経験あり群は加害経験なし群と比較して有意に（学級で）大切にされる感觉得点が低いことが示された。一方で、女子において、ネットいじめの加害経験あり群は経験なし群に比べて有意に（学級で）大切にされる感觉得点が低かったが、従来のいじめ加害についての経験の有無による有意な群間の得点差は示されなかった。

小学3年生から6年生を対象として研究をおこなった Werner & Grant (2009) では、男女ともに、仲間から受容される傾向（教師評定による）と関係性攻撃（教師評定による）との間に中程度の有意な負の相関が示されたことが報告されており、本研究の結果も一部これに準じるものであろう。ただし、本研究では中学生も分析対象に含めていること、従来のいじめ加害行動に関係性攻撃だけでなく身体的攻撃も含めていること、評定者が児童生徒本人であることなどが Werner & Grant (2009) で行われた研究と異なっており、その点が分析結果の相違と関連するのかもしれない。ネットいじめ加害については、関係性攻撃のみを扱っているため、女子においても経験の有無によって（学級で）大切にされる感觉得点の有意な群間差が示された可能性が推測される。

では、なぜ、従来のいじめ加害について女子で経験の有無による有意な群間の得点差が示されなかったのであろうか。本研究で作成された（学級で）大切にされる感覚尺度だけでなく、自然な自己開示、学級への満足感のいずれについても、女子において従来のいじめ加害経験の有無による有意な群間の得点差は示されなかった。先行研究において、女子の友人関係では男子に比べて親密確認活動や共有活動、閉鎖的活動が有意に多いことが報告されており（榎本, 1999）、対人関係においてそのような活動が多ければ多いほどそこに葛藤が生まれる機会も多く、そのことが加害行動につながる可能性は否定できないだろう。また、中学1・2年生を対象とした谷口（2010）の研究では、女子のいじめ行為容認の高さが確認されており、関係の親密さを求めることに伴うトラブルへの対処方略として安易に攻撃行動が選択される可能性も推測される。そういったことから、女子では、大切にされる感覚や学級への満足感の高さだけではいじめの加害行動を予測することが難しいのかもしれない。

今後の課題

本研究では、（学級で）大切にされる感覚尺度が、従来のいじめ加害とネットいじめ加害を予測できるかどうか検討することを目的のひとつとしたが、1時点での横断データを用いた分析であったため、実際の因果の流れについては検証できていない。また、ネットいじめの経験あり群に分類された子どもの数が一桁と少なかったため、分析結果を一般化することは難しいかもしれない。さらに、いじめ加害の経験を弁別する尺度として本研究で用いた既存の尺度の数は少なく、それ以外にも複数の尺度を比較の対象として検討する必要があったことは否定できない。加えて、女子における従来のいじめ加害を予測する要因についての検討

も必要であろう。これらのことを踏まえて、今後、学級集団の状況を測定する複数の尺度と（学級で）大切にされる感覚尺度とのいじめ加害経験弁別力の比較をおこなうことも含めて、子どもたちがいじめの加害行動を起こす因果の流れについて、より多くの児童生徒から縦断データを収集し分析することによって詳細に検討する必要があるだろう。

引用文献

- Barboza, G. E., Schiamberg, L. B., Oehmke, J., Korzeniewski, S. J., Post, L. A., & Heraux, C. G. (2009). Individual characteristics and the multiple contexts of adolescent bullying: An ecological perspective. *Journal of Youth & Adolescence*, **38**, 101–121.
- Bollmer, J. M., Milich, R., Harris, M. J., & Maras, M. A. (2005). A friend in need: The role of friendship quality as a protective factor in peer victimization and bullying. *Journal of Interpersonal Violence*, **20**, 701–712.
- Bronfenbrenner, U. (1979). *The Ecology of Human Development: Experiments by Nature and Design*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Doll, B., Song, S., & Siemers, E. (2004). Classroom ecologies that support or discourage bullying. In D. L. Espelage & S. M. Swearer (Eds.), *Bullying in American schools: A social-ecological perspective on prevention and intervention* (pp. 161–183). Mahwah, NJ: Erlbaum.
- 榎本淳子 (1999). 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, **47**, 180–190.
- Espelage, D. L., & Swearer, S. M. (2010). A social-ecological model for bullying prevention and intervention: understanding the impact of adults in the social ecology of youngsters. In S. R. Jimerson, S. M. Swearer, & D. L. Espelage (Eds.), *Handbook of Bullying in Schools: An International Perspective* (pp. 61–72). New York: Routledge.
- Goodstein, P. K. (2013). How to stop bullying in classrooms and schools (pp. 142–155). New York: Routledge.
- Harter, S., & Marold, D. B. (1991). A model of the determinants and mediational role of self-worth: Implications for adolescent depression and suicidal ideation. In J. Strauss & G. R. Goethals (Eds.), *The self: Interdisciplinary approaches*. New York: Springer-Verlag. pp. 66–92.
- 長谷川真里・堀内由樹子・鈴木佳苗・佐渡真紀子・坂元 章 (2009). 児童用多次元共感性尺度の信頼性・妥当性の検討 パーソナリティ研究, **17**, 307–310.
- 細田 絢・田嶋誠一 (2009). 中学生におけるソーシャルサポートと自己への肯定感に関する研究 教育心理学研究, **57**, 309–323.
- 伊藤亜矢子・松井 仁 (2001). 学級風土質問紙の作成 教育心理学研究, **49**, 449–457.
- 伊藤美奈子 (2017). いじめる・いじめられる経験の背景要因に関する基礎的研究 ——自尊感情に注目して—— 教育心理学研究, **65**, 26–36.
- 河村茂雄 (2000). Q-U 学級生活満足度尺度による学級経営コンサルテーション・ガイド——代表的なパターンによる学級集団の状態の理解と具体的な対応策 図書文化社
- 国立政策研究所 (2016). いじめ追跡調査 2013–2015 生徒指導・進路指導研究センター
- 栗原慎二・井上 弥 (2010). アセス＜学級全体と児童生徒個人のアセスメントソフト＞の使い方・活かし方 ほんの森出版
- 松尾直博 (1999). 児童用自己価値・他者価値尺度の作成および信頼性、妥当性の検討 東京学芸大学紀要 I 部門, **50**, 75–80.
- 松尾直博 (2001). 中学生の自己価値・他者価値と社会的不適応との関係 東京学芸大学紀要 I 部門, **52**, 111–114.
- 文部科学省 (2016). 平成27年度「児童生徒の問題行動等生徒指導上の諸問題に関する調査」
- Nansel, T. R., Overpeck, M., Pilla, R. S., Ruan, W. J., Simons-Morton, B., & Scheidt, P. (2001). Bullying behaviors among US youth. *Journal of the American Medical Association*, **16**, 2094–2100.

- 岡安孝弘・高山 巖 (2000). 中学校におけるいじめ被害者および加害者の心理的ストレス 教育心理学研究, **48**, 410–421.
- 大西彩子・黒川雅幸・吉田俊和 (2009). 児童・生徒の教師認知がいじめの加害傾向に及ぼす影響——学級の集団規範およびいじめに対する罪悪感に着目して 教育心理学研究, **57**, 324–335.
- 谷口明子 (2010). 中学生のいじめ認識——いじめ経験との関連から—— 教育実践研究, **15**, 193–202.
- Werner, N. E., & Grant, S. (2009). Mothers' cognitions about relational aggression: Associations with discipline responses, children's normative beliefs, and peer competence. *Social Development*, **18**, 77–98.

本研究は、日本学術振興会科学研究費 基盤研究 (C) [課題番号：26380913] により実施された内容を含む。

Summary

Relation between Sense of Being Cared in the Class and Bullying

Yasuyo Nishino

In the present study, Sense of Being Cared Scale (SBCS) was developed, and relationship between being cared and bullying (both traditional and cyber) was investigated. The sample consisted of two hundred and ninety-seven Japanese elementary school students (mean age =10.26 years, 51.9% girls) and four hundred and thirty-one junior high school students (mean age =13.32 years, 47.8% girls). Principal component analysis and confirmatory factor analysis indicated that SBCS was composed of 7 items with a 1-factor model. The internal consistency of the scale was shown by calculating Cronbach's α , and its concurrent validity was demonstrated by evidence that SBCS was correlated positively with self-worth and classroom climate (e.g., satisfaction in the class). The girls scored higher than the boys on sense of being cared. Further, the results showed the higher sense of being cared boys have, the less they might take bullying behaviors. Implications of these findings are discussed.

<This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number 26380913.>

【key words】 bullying, sense of being cared, late childhood, early adolescence, classroom climate